慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | フルシチョフ期の中国・ソ連・モンゴル三国関係：モンゴル人民共和国の対外的自立性に関する一考察 |
| Sub Title | Sino-Soviet and Mongolian relations among the period of Khrushchev : a study of independent foreign policy of the Mongolian people's republic |
| Author | Oyunbaatar, Munkhjin |
| Publisher | 慶應義塾大学大学院法学研究科内『法学政治学論究』刊行会 |
| Publication year | 2016 |
| Jtitle | 法學政治學論究 : 法律・政治・社会 (Hogaku seijigaku ronkyu : Journal of law and political studies). Vol.108, (2016. 3) ,p.65- 91 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10086101-20160315-0065 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# フルシチョフ期の中国・ソ連・モンゴル三国関係

## ——モンゴル人民共和国の対外的自立性に関する一考察——

オユンバートル・ムンヘジン

一　はじめに
二　モンゴル援助をめぐる中ソの競合
三　モンゴルの政治路線の選択
四　中国の巻き返し戦略
五　おわりに

# 一　はじめに

二〇一五年九月二九日、モンゴル国大統領エルベグドルジ（Ц. Элбэгдорж）は国連総会においてモンゴルの永世中立の意向を表明した。[1] その後、モンゴル国内では多くの議論が巻き起こっており、永世中立が実現すると断定するのは未だ早いかもしれない。しかしこの動きは改めて、モンゴルはこれまで自国の対外的自立性をどのように示してきたのかという問題を提起している。

かつてオーエン・ラティモアは「衛星国」という概念を提起し、モンゴル人民共和国は創立当初から完全にソ連の影響下に置かれた「衛星国」だと説明した。[2] 彼に続く多くの研究者達もこの見解を継承した。つまり、モンゴルは対外的に自立して活動することのない国家だとみなしてきたのである。こうした見解は、ソ連においてスターリンが支配していた時代のみならず、中ソ両国が対立を強めた時期についても維持された。たとえば、坂本是忠の研究[3]を見てみよう。彼はモンゴルとソ連の一体性について疑問を呈し、一九五〇年代と六〇年代に、中ソ両国がモンゴルをめぐり経済的な援助合戦を繰り広げた事実に注目した。しかし、坂本はそこでモンゴルの対外的自立性についてまでは語らなかった。モンゴルの経済に注目した、日本以外の研究者の研究もこの点では同じである。[4]

他方、中ソ対立の歴史を検討する近年の研究においても、モンゴル人民共和国の政治と外交の自立性を過少評価する傾向が見られるように考えられる。たとえばリュティ『中ソ対立』[5]は中ソ対立のイデオロギー問題に注目しながら、モンゴルの動向に目を向けていない。またロシアの研究者、ガレノヴィッチの一連の研究[6]は、伝統的な中ソ関係に多大な関心を寄せているが、関連するはずのモンゴルの政治と外交に少しも配慮していない。

そこで本稿は、中ソ対立が公然化した時期（一九六〇から一九六三年）に焦点を当て、ソ連・中国・モンゴルの三国

の関係を分析し、モンゴルはそこで対外的自立性を示したのか、示したとすれば、それはどのような形で現れていたのかということについて検討したい。ここでは当然ながら、ソ連と中国の対外政策ばかりでなく、モンゴル内部の政治的アクターの行動も分析の対象となる。モンゴルの政治と外交を検討することによって、中ソ対立の隠された一面を明らかにすることも本稿が掲げる課題の一つである。

## 二　モンゴル援助をめぐる中ソの競合

一九五二年八月二九日、モンゴルの指導者、首相のツェデンバル（Ю. Цэдэнбал）はスターリンに招かれて中ソの首脳会談に参加した。[7] さらにその一カ月後の九月二九日に、彼はモンゴルの首脳として歴史上初めてとなる中国訪問を果たした。[8] この時の外遊からツェデンバルが引き出した結論は、一〇月一日に彼が部下たちに向かって語った以下のような言葉からうかがうことができる。

「我々は、ソ連から学んで来た。今でも学んでいる。これからも学ぶ。また、中国人民からも学ぶべきである。中国から学ぶことはたくさんある。貴方達は党員であるから、すべてのものを学ぶべきだ。我が国にはイデオロギー的に後れた人々はいる。その人たちにモンゴル人民と中国人民の間に続いてきた対立が終了したことをよく理解させるべきである。[9]」

この発言で注目されるのは、ツェデンバルが中国をソ連と同じレベルで教えを受けるべき存在として扱っていることである。おそらく政治経験の浅い若い指導者は、中国訪問の際の中国側の手厚い歓迎ぶりに心を動かされ、中国は社会主義国の共通の大義のためにモンゴルに多大な援助を与えてくれる国だとみなしたのである。事実、ツェデンバ

ルは一〇月四日にも中国指導部と会談し、「中モ経済・文化協力協定」[10]を締結して、両国の関係を深めようとしていた。

翌一九五三年三月にスターリンが死去すると、ソ連、中国、モンゴルの三国の関係はさらに変化していった。絶対的指導者を失ったソ連指導部は混乱し、国内問題に集中せざるを得なかった。言い換えれば、ソ連指導部はモンゴルも含めて、対外関係全般にわたって一時的に関与を弱めざるを得なかったのである。この状況を見た中国指導部は、モンゴルにおけるその影響力を拡大する機会が来たとみなしたようである。一九五四年七月三一日から八月一日にかけて、周恩来が首都ウランバートルを訪問した[11]。これは二年ぶりのことであった[12]。次に、一一月一九日から二五日にかけて開かれたモンゴル人民革命党第一二回党大会に、中国は内モンゴル自治区第一書記で政治局員候補のウランフ（Улаанхуу 一九〇五から一九八三年）[13]を代表として送った。ここでウランフが、モンゴルと中国の関係強化の必要性を強調したのは言うまでもない。彼は一一月二九日に、ツェデンバル、党第一書記ダンバ（Д. Дамба 一九〇八から一九八九年）、財務大臣代理ドゥゲルスレン（Б. Дугэрсүрэн 一九二二から一九九三年）らと会談し、中国の対モンゴル援助について話し合った[14]。歴史家ソニーが指摘するように、これはモンゴルに対する中国の強い関心を示すものであった[15]。

以後も、中国側は要人をモンゴルに送り、労働者派遣を含む多くの援助を行った。一九五五年一月にモンゴル側はこうした労働者の提供に感謝し、次のような文書を送った。「中国共産党が我らの要請に応じて労働者を提供する準備を整えていることに大変満足している。貴国の援助により両国人民は確固たる兄弟的友好関係を築くであろう。このことは今後の両国の発展に大きな意義を持っている」[16]。

前後の状況からみて、この時点ではまだ中国人労働者の派遣に関する協定は正式には締結されていなかったようである。この件に関する両国の協議はその後に始まり[17]、四月七日に締結された[18]。八月五日付で中国政府がモンゴル政府に送った外交文書によれば、中国側は同年中に八二〇〇人の労働者の提供を予定していたが、そのうち七二七三人については既にモンゴルに到着しており、各種の建設に関わっていた[19]。他方、同協定に関する一一月二九日付のモンゴ

ル外務省の調査報告によれば、一九五五年には七二八四人の中国人労働者が送られ、その家族一三二二人がモンゴルに到着していた[20]。両者の報告には若干の相違がみられるが、中国の労働者の派遣が非常に円滑に進んだことは明らかである。

こうした中国の積極的な姿勢は、この時期の同国の要人の発言からも確認できる。一九五五年九月に中国政府代表団長ヤン・シ・ジェンは、ダンバと会談した際に、「中国指導部はモンゴルの社会主義の発展を中国の発展と同様に考える。したがって、モンゴルの国家発展に参画していることを大変誇りに思う[21]」と述べた。また、同じ九月に、モンゴル駐在中国大使ヘ・インもダンバとの会談において次のように述べた。「中国とモンゴルは兄弟国を超えたより密接な関係を持っている。我が国民はモンゴル国民に援助を与えることを自分たちの義務であると思っている[22]」。この時期、中国指導部はかつてないレベルで、モンゴルに接近していたのである。

一九五六年一月に北京とウランバートル間の鉄道が開通すると、さらに両国の経済協力は加速した[23]。その結果、翌一九五六年には、モンゴルにおける中国人の人口比率（一・九％）はソ連人[24]のそれ（一・六％）を上回った[25]。この事実はソ連側を不安にさせたようである。ツェデンバルは自身の日記に、二月二四日のミコヤンとツェデンバルの会談にふれて次のように記していた。

「ミコヤンは、労働者の大半が中国人労働者にならないように自国〔以下モンゴル…引用者〕の労働者を育てなければいけないと言った。（中略）また、中国のモンゴル大使館に内モンゴル人が来ているかどうか尋ねた。私〔ツェデンバル〕はいいえと答えた。（中略）ミコヤンは次のように述べた。『毛沢東は、モンゴル人民共和国を中国に統一させるという提案を我々に二回も提案した。我々はモンゴル人自身が解決する問題だと伝えた。』ミコヤンは『中国側が同問題を貴国に提案したことはあるか』と訊いた[26]」。

ここから明らかなように、一九五六年二月という時点で、ソ連指導部は中国とモンゴルの接近に警戒心を抱いていたのである。しかし中国側はソ連側の懸念を気にかけることなく、その後も労働者の派遣、モンゴルの集合住宅、国家中央デパート、橋、道路、火力電力発電所等々の建設など、経済援助を続けた。[27] また、一九五六年二月七日にはモンゴルと新しい貿易議定書を締結し、同年の両国間の貿易額を一九五五年の二倍にするという目標を掲げた。[28] この目標は達成された。[29] さらに八月二九日には、モンゴルと中国の間で「経済技術援助協定」が締結された。これにより、中国はモンゴルに対し、一億六千万ルーブルの無償援助を行うことを決めていた。[30] 両国の関係は、一九五七年四月にモンゴルが内モンゴル自治区の首都フフ・ホトに領事館を設置したことで頂点に達した。[31]

しかし一九五七年になると、ソ連側も傍観政策を捨て、対抗的な措置を取り始めた。ソ連指導部は自国の経済力を見せつけるように、中国の援助を大きく上回る額の援助を行うと約束した。この援助の申し出を受けて、同年五月一〇日にモンゴル代表団がソ連へ出発した。この代表団を構成したのは、ツェデンバル、ダンバ、閣僚会議第一副首相シレンデヴ（Б. Ширэндэв 一九一二から二〇〇一年）、閣僚会議副首相兼国家計画委員会長ツェンデ（Л. Цэнд 一九二〇から一九八六年）、外務大臣アディルビシ（Д. Адилбиш 一九一七から一九九二年）、農牧畜大臣バルジンニャム（Д. Балжиннямын 一九一三年から）、財務大臣モロムジャムツ（Д. Моломжамц 一九二〇年から）、工業大臣バトオチル（О. Баточир）という人々であった。つまり、モンゴル指導部の主だった人々がほぼ全員、この訪問に参加したのである。ソ連側の援助の申し出が非常に魅力的であったので、モンゴル指導部はこのような代表団を編成したものと考えられる。

結局、同月一五日にツェデンバルとソ連首相のブルガーニンの間で経済協定が、またモンゴル人民革命党第一書記のダンバとソ連共産党第一書記のフルシチョフの間で両党間の合同協定が調印された。[32] この交渉過程では、ソ連側はモンゴル側の要求に寛大に対応しており、それにモンゴル代表も満足を表明した。[33] この時の会談にソ連側の一員として参加した外交官のカピッツァ（М. Капица）の回想録も、このときソ連側がモンゴルに手厚い歓迎を行ったことを記

している。[34]

こうしたソ連側の巻き返しもあり、一九五七年の時点でのモンゴルの貿易関係においてソ連の占める割合は圧倒的であった。ソ連以外の共産国（中国を含む）がそこに占める割合は、すべて併せても二五％にすぎなかったのである。[35]

モンゴルとの貿易関係でソ連の優位が示されるなか、一一月に毛沢東がソ連を訪問し、フルシチョフと会談した。ここで彼は「ウランバートルから北京までの鉄道に関して言えば、この鉄道は両国〔ソ連と中国〕の関係を良好にした。我々はソ連の無償援助に感謝する」[36]と発言した。この発言は短いが、中ソ間で進行していた対立に照らしてみれば、毛沢東はここで、モンゴルは中国の影響圏内にあるという認識を示したように見える。

こうした状態にあったので、その後も中ソ両国はモンゴルに対する経済援助を活発に行った。まず中国側は、一九五八年一二月二九日に調印した協定により、モンゴルに一億ルーブルの長期借款を行った。[37]この長期借款は、一九五八年一二月にモンゴル閣僚会議副議長モロムジャムツを団長とする代表団が訪中した際に締結された。[38]周恩来ら中国指導部は、一二月一六日のモロムジャムツらとの会談において、様々な歴史的経緯に触れつつ、将来的により多くの援助を行うことが中国の義務である旨を強調した。[39]次に一九六〇年五月に周恩来がモンゴルを訪問し、二億ルーブルの借款を約束した。[40]ただし、これはその後の中ソ対立の進行によって実現されなかった。

他方でソ連側は、一九五八年八月にモスクワにおいてモンゴル代表団を迎え、一九六一年から一九六五年までの貿易問題や経済協力に関する議定書に調印した。[41]さらに一九五九年一二月九日には両国は経済及び科学協力に関する議定書を、[42]また一九六〇年二月一一日には経済協力の拡大を謳う協定を調印した。[43]二月一六日にモンゴル人民革命党政治局会議及び閣僚会議拡大会議が開かれた際に、ツェデンバルはこの協定を高く評価した。実際、同協定はモンゴル国内に於ける大型火力発電所、自動車修理工場、暖房用設備などの重要な施設の建設に、技術的、経済的な援助を与えるという内容のものであった。[44]さらに同年九月九日には、ソ連はモンゴルと「経済援助及び技術援助協定」を結

んだ。[45] 明らかに、ソ連指導部はモンゴルにおけるソ連の経済的影響力の維持を考えていたのである。

このような中ソの援助競争のおかげで、モンゴル経済は急速に発展していった。とりわけ、一九五三年から一九五八年にかけてのモンゴルの五ヶ年計画と、一九五八年から一九六〇年にかけての同国の三ヶ年計画の達成は、両国の援助なしでは考えられなかった。この八年間に、モンゴルの工業生産成長率は六三・八％という高い伸び率を示したのである。[46]

しかし、一九六〇年になると中ソ対立が公然化し、モンゴルもそれに巻き込まれていった。たとえば、一九六〇年に中国がモンゴルのダルハン市に建設すると約束した大型鋼鉄工場のプロジェクトは、一九六一年に全てソ連によって取って代わられた。[47] 一九六二年六月七日にモンゴルが経済相互援助会議（コメコン）に加盟したことによって、こうした傾向は一層強まっていくのである。[48] この事実はモンゴル側に即して言えば、中ソ関係が悪化する中で、モンゴルが中国よりも経済規模の大きいソ連を第一の友好国として選択せざるを得ない状況に追い込まれていったことを示している。

## 三　モンゴルの政治路線の選択

一九五六年のスターリン批判後、モンゴルではダンバとツェデンバルの間で激しい権力闘争が起こった。[49] このときツェデンバルは、ソ連のスターリン批判を利用したダンバに追及され、苦しい立場に立たされた。[50] 注目すべきことに、この時期、両者は国内政策ばかりではなく、対中政策においても意見を異にしていた。たとえば、一九五七年一月九日に行われたモンゴル駐在ソ連大使ピサレフ（В. Писарев）との会談で、ツェデンバルは、ダンバが中国共産党第八回党大会に参加した際に中国から労働者の派遣、その他の援助の約束を取り付けたと述べた。ここでツェデンバルは、

中国政府からの援助受入れの決定に先だって、モンゴルはソ連共産党に相談する必要があると述べた。[51] 言い換えれば、ツェデンバルはソ連大使に、ダンバを通して中国から援助を受ける話が持ち上がっていることを知らせ、ソ連側に忠誠心を示そうとしたのである。この点に関連して、歴史家ジャンバルスレンがモンゴルの「モールズ暗号」送信者トグトフの回想を紹介している。それによれば、一九五九年三月三〇日に開かれたモンゴル人民革命党中央委員会第三期総会の休憩中に、ツェデンバルとダンバは中ソ関係において激しく言い争った。ダンバは労働力不足の解消がモンゴル経済にとって不可欠であると考え、中国からの労働者の派遣に期待をかけていたようである。それに対して、ツェデンバルはソ連指導部の警戒心を共有していた。トグトフ自身も、スターリン批判後にダンバは中国寄りの姿勢を示す傾向にあったと述べたと言われる。[52] この点についてより完全な証明は現在の史料開示の状況では不可能であるが、ダンバとツェデンバルの対立に関しては、同様の解釈が別の歴史家（ボルドバートル）によっても示されている。[53]

この時期、ソ連指導部がツェデンバルの対中・対ソ姿勢に注目したことは疑問の余地がない。一九五七年に国内の権力闘争においてツェデンバルが劣勢にあることを見て取ると、ソ連指導部は五月にヴォロシーロフをモンゴルに派遣した。これは、彼を支援するためだったと考えられる。[54] また、同年九月にモンゴル駐在ソ連大使として赴任してきたモロトフの存在も、ツェデンバルにとって大きな意味をもった。[55] なぜならば、彼がモンゴルに来ると同時に始まったソ連・モンゴル国境交渉において、ダンバはモロトフの提案に反対していたからである。[56] モロトフにはツェデンバルを助ける理由があったのである。

こうした状況にあった一九五七年一一月に、モスクワにおいて一〇月革命四〇周年記念国際共産主義国大会が開かれた。この大会は、中ソ両国の対立関係がさらに深刻化していることをモンゴル指導部に気づかせる機会になった。というのも、同大会において毛沢東は、ソ連はもはや国際共産主義運動の指導国ではなく、あくまでも中国と対等な位置にあるとする認識を隠そうとしなかったからである。毛沢東はここで次のように述べた。

「私はモスクワに二回も来た。最初の時は、息子が父の下を訪れているような性質のものであった。平等の権利はなかった。その時にはよく平等だと語っていたが、それは口先だけの言葉だった。今回は違う。皆も感じているだろう。たとえば、声明の原案について何回も意見を聞いている。もし意見が合わなければ、何回も意見を聞かなければいけない[57]」。

ここからうかがえるように、この時期の毛沢東にとって最も重要なことは、中ソが対等の関係にあると確認することだったのである。

この大会では、他にもツェデンバルにとって衝撃的な出来事があった。というのも、このときソ連側は不注意にもモンゴル人民革命党第一書記のダンバを、首相のツェデンバルよりも上位者であるかのごとく迎えたからである。ここでダンバよりも格下であるかのごとき待遇を受けて、ツェデンバルが慌てたであろうことは想像に難くない[58]。

モスクワ大会以降、ツェデンバルのダンバ攻撃が目覚ましい勢いで進行した。ダンバは一九五八年一一月に第一書記の地位から降格された。さらに翌年三月には、第二書記からも降格され、側近たちと共に粛清されていった[59]。結果的にツェデンバルは唯一の競争者を排除し、強大な権限を獲得した。しかし、このダンバ解任の動きは、モンゴル国内政治の出来事に終わらなかった。ダンバの降格に不快感を抱いた中国指導部は、一二月五日にモンゴル駐在ソ連大使B・レフチンと中国大使孟英との会談を通じて、次のようにダンバ追放に関して意見を表明したのである。以下はソ連外交文書の概略である。

「孟英は、中国大使館はダンバ解任の本当の理由を明らかにできていない。（中略）何人かの同志からダンバとその他の人間との教養の差に関係があるという説明があった。もし、本当にこの理由であれば、なぜ彼が任命された当初に、このような重大な要素を考慮しなかったのか。その他にもスレンジャブとダムディンら二人の中央委員会書記が解任された。ここでは政治局委員

間に何らかの問題で意見の対立があったことを含め、他に理由があるのではないだろうか。（中略）もしその可能性があるのであれば、中ソ両国はこの問題に関してお互いに意見交換を行うべきである。〔しかし〕これに対してソ連大使は〔中国指導部に〕、如何なることも知らないという内容のことを述べた[60]」。

明らかに、モンゴルの権力闘争でツェデンバルが勝利したことは、中国にとって重大な事件だったのである。このような形で中国大使がソ連側に意見交換を求めた事実は、彼らが受けた衝撃の強さを示している。

しかしながら、ツェデンバルはこの時期に一方的にソ連寄りの政策をとったわけではなかった。元モンゴル駐在ソ連大使館員Ⅲ・ナディロフは、ツェデンバル指導部に関して次のように述べている。

「〔一九六〇年代初頭に〕中ソ両国間に起こっていた新しい状況とその根底の原因について、ツェデンバルはよく理解していた。彼にとってこの両大国のイデオロギー的な対立に巻き込まれるのは最初から明らかだった。彼は積極的にソ連の利益の実現を促進するのと同時に、この状況を利用し、モンゴルにとっての最大限の利益を獲得しようとした[61]」。

ナディロフは、ソ連の公文資料館の重要文書にアクセスすることが可能であった。ここにある彼の評価は、そうした未公刊文書に基づいていると考えられる。

実際、中ソの対立が深まる中で、モンゴル指導部は中国指導部の動向に強い関心を寄せ続けた。一九六〇年六月一七日にモンゴル指導部は、中国駐在の自国大使シャラヴ（Д. Шарав）を中国駐在ソ連大使チェルボネンコ（С. Червоненко）[62]に面会させ、情報収集に努めた。このときチェルボネンコは、世界工業連合の総会において中国が取った行動を批判的に述べ、中ソ間に大きな摩擦があると説明した。言うまでもなく、彼は中国側に問題があるという立

場で起こっている事態を説明したのである。このときチェルボネンコは中国の覇権論にまで言及し、中国側は中ソ両国間の問題を西側に暴露しているとまで述べた。[63] 中ソの対立は不穏な状態になっていたのである。

その後、七月一日に中国外交部副部長が、英国軍人の訪中に関連して共産圏諸国の大使を招待した。シャラヴはその会における中国政府の動向を次のように分析した。「今回の集まりで、〔中国側は〕英国軍人について話すのではなく、（中略）ソ連と中国に路線の不一致があることを表明したかったようだ。中ソのイデオロギー面での相違は誰にも明らかになりつつあるため、共産圏の国々にこのような方法で説明しようとしているようだ」。[64] 次に八月一日にスイス大使館において開かれたスイス国家祭の会場に招待された際にも、シャラヴは中国駐在ソ連大使顧問マルヒン（Малухин）から意見を聴取した。ここでマルヒンはシャラヴに、ソ連指導部は、中国とのイデオロギー的な路線の相違のため、中国に派遣していたソ連専門家を九月一日までに全員引き揚げることを決定したと伝えた。[65] 中ソ対立が深刻化するなかで、モンゴル指導部は懸命に情報収集に努めていたのである。

こうした状況で、モンゴル指導部は新たな姿勢を示すようになった。中国出版物に規制をかけ、ソ連側への支持姿勢をみせるようになったのである。このことはすぐに中国側の反感を引き起こした。同年一〇月一日、〔中国大使館〕で開かれた宴席において、中国大使顧問ジャオ・ジェンはモンゴルの東部局長ツェレンドルジ（Л. Цэрэндорж）に対し、「〔モンゴル側は〕在モンゴル中国大使謝甫生の記事をウネン紙に掲載したが、（中略）本人の同意なしにほぼ全部が修正されている。（中略）それどころか本人が述べていないことまで書かれている。これは屈辱的なことだ」[66] と抗議したのである。また、中国の新華通信の記者フアン・エニも、一一月三〇日の『労働』新聞に掲載された記事に削除された部分があると抗議した。[67]

このように、モンゴル指導部がソ連寄りの姿勢を示すようになったにもかかわらず、中国指導部は中国とモンゴルの関係がそのまま悪化していくのを望んでいなかった。その事実は、一九六〇年五月になされた周恩来の訪問から明

らかである。このとき中国側はモンゴルに多額の経済支援を行う約束をしたのである。またこれに関連して、一〇月一六日のモンゴル大使代理トイヴと中国海外貿易部局代理李強の会談も注目に値する。このとき中国代表は、個人的な意見と述べた上で、次のような提案をしていた。「モンゴルは鉱物資源を加工し、海外に輸出して外貨を獲得すべきである。中国は必要な機械を与えることができる」[68]。モンゴルの経済発展にとって、中国のこうした提案は歓迎すべきものであった。モンゴル指導部が、この時点で、一方的にソ連に傾斜することを避けようとしたのは当然であった。

ソ連指導部も、こうしたモンゴルと中国の関係に対して警戒を緩めなかった。一九六〇年六月ルーマニア共産党大会に参加したジャルガルサイハンの回想は、そのことを裏付けている。そこには次のように書かれてあった。

「ソ連共産党中央委員会書記ムヒッディノヴ（Мухиддинов）、ソ連共産党中央委員会社会主義諸国共産党労働者党連絡部長アンドロポフら（Ю. Андропов）が同大会に向かっていたモンゴル代表ジュラルガルサイハンとドゥゲルスレンらとモスクワで会った。この形式の面会は前例がなかったので、我々も非常に驚いた。（中略）彼らは、ルーマニア大会において中国について秘密討論を行う準備をしていたようであった。我々は、そのような討論が行われる如何なることも知らなかった。彼らも何も言わなかった。会談中に彼らは、毛沢東が提唱していたチンギスハーン問題[69]について我々に訊いた。（中略）彼らは我々〔の考え〕を調べていたようだ[70]」。

こうしたソ連指導部のモンゴルと中国の関係に対する猜疑心は、この年の六月二七日に行われた中国駐在アルバニア大使ミハイル・ピリフティとチェルボネンコの会談以降は、さらに強まったのではないかと考えられる。なぜならば、アルバニア大使はここで、周恩来がツェデンバルと会った際に、中国がモンゴルから一三〇トンから三〇〇トン

のウランを購入する提案をしていたことを、チェルボネンコに明かしていたからである。[71] この時期には、中ソ両国は核開発問題をめぐって相互に不信感を募らせていた。ソ連は中国が独自に核技術の開発を進めるのではないかと警戒しており、モンゴルと中国がウランについて議論することは、それだけで重大事件であった。

一方、中国のモンゴルに対する友好姿勢は中ソ関係がより悪化した一九六一年になっても変化しなかった。中国は、この年の二月にモンゴル人民共和国四〇周年記念日を中国において盛大に祝った。[72] その後も三月八日に周恩来が共産圏諸国の大使を集めた会において、モンゴルが経済的に他国に援助を与えるレベルではないにもかかわらず、中国の自然災害に対して一万六千トンの食料品を無償で援助を行っていることをわざわざ取り上げ、褒め称えた。[73] 五月三日には、中国外務大臣代理ゼン・ユンがモンゴル大使シャラヴに会い、モンゴル国内で起こった寒波による被害に対して二億ルーブルの無償援助を約束した。[74] 中国指導部は、まだモンゴルが対ソ一辺倒になってしまったと考えていなかったのである。

モンゴル指導部は、中ソ対立の煽りを受けて中国との対立に陥ることのないように努めた。同年三月二五日にソ連駐在モンゴル大使ルブサン（Лувсан）は、ソ連交通大臣ベシェヴ（Н. Бешев）に会った際、中ソ関係の悪化によりモンゴルを縦断する鉄道からの収入が激減すれば、モンゴルの財政が打撃を受けると指摘した。彼は、モンゴルが中国側に鉄道輸送を減らさないように働きかけることを提案した。[75] 事実、この鉄道から得られる外貨はモンゴルの社会主義発展にとって貴重であった。[76] モンゴルは自国が中ソ対立に影響を与えることができないことを自覚していたが、そのなかでも中ソ関係がモンゴルに及ぼす悪影響を少しでも緩和しようと努めていたのである。

それでも、一九六一年にソ連共産党第二二回党大会が開かれたときには、モンゴル指導部はさらに一歩、ソ連寄りの立場を示さざるを得なくなった。ここでモンゴル指導部は、中ソ対立における自国の立場を公式に表明したのである。ツェデンバルは演説において、「国際共産主義運動を分裂させるために行っているアルバニア労働党指導者の行

動を、ソ連共産党第二二回大会に参加した各共産党指導者が批判した。その中で、モンゴル人民革命党代表団も一致して非難した。（中略）ソ連共産党およびマルクス・レーニン主義各党がアルバニアの労働党の反マルクス主義路線を批判したことは、正しいと考える。この問題に関する中国代表の説明を受け入れてはいけない」[77]と述べたのである。ここでツェデンバルは、モンゴルがソ連寄りの立場を採ることを公式の場で初めて表明したのである。

このようにモンゴルは中国への批判を強めたが、中国側は粘り強くモンゴルとの関係を維持しようとした。この点では、一九六二年九月に行われた中国共産党第一〇期総会についての中国駐在モンゴル大使館筆頭書記官ダライ（Ц. Даваа）の極秘報告が注目に値する。ダライは報告が不確実な情報に基づいているとしつつ、同総会で中国とソ連の路線の対立が明確になったと強調し、続けて、中国がモンゴルとの関係改善を図り、援助を継続するべきとの意向を示したようだと記していた[78]。つまり、中国は、モンゴルと対立することでモンゴルがソ連圏に傾く条件を作りたくなかったので、ソ連圏諸国とモンゴルを区別して扱っていたのである。

だが、既にモンゴルと中国両国の関係は限界に達していた。一九六二年一二月二七日に行われたツェデンバルと周恩来との会談はこのことを示している。この会談では中国側が譲歩する形で中国・モンゴル国境条約が締結され、協力的な面も見られなくはなかった。しかし、既に亀裂が深まっていた両国関係の悪化に歯止めがかからなかった[79]。その事実は、次節で取り上げるチンギスハーン生誕記念祭をめぐる事件で明らかになるのである。

## 四　中国の巻き返し戦略

以上見てきたように、一九六一年にモンゴルがソ連寄りの姿勢を明白に示したことにより、同国とソ連の関係は強化された。しかし中国指導部はそれで諦めることはなかった。中国側は、この後もモンゴルを自国側に引き込もうと

したのである。このため中国指導部は、チンギスハーンの生誕八〇〇周年記念祝賀祭を利用することを考えた。チンギスハーンを中国とモンゴルの共通の歴史的人物とみなし、祭典を中国で開催しようとしたのである。だが、モンゴル政府はこの動きに納得せず、同記念祭を自国で祝う動きに出たことから、同問題は中・ソ・モンゴルの三国に関わる複雑な問題へと発展したのである。

まず、一九六二年五月に中国の内モンゴル自治区において、チンギスハーン生誕八〇〇周年記念祭が盛大に行われた。[80] このモンゴルの歴史的英雄の記念祭を中国が開催することに対して、モンゴル指導部は警戒しており、徹底的に情報収集を行っていたようである。一九六二年一月九日に外務省のトイヴ（Л. Тойв）は次のように報告していた。

「中華人民共和国が一九六二年にチンギスハーン生誕八〇〇周年記念祭を盛大に祝う予定であるという情報が多く寄せられている。いつ、どのように開催するのかについて詳しい情報はない。だが、我々が有するいくつかの情報を報告する。

第一に、一九六一年一一月二一日の招待会において中国外務省外交部部長代理リ・ツヤン（ли шя ян）は、貴国〔モンゴル〕はチンギスハーンを見捨てたようだが、我々はチンギスハーンを英雄と見なしていると述べた。（中略）

第二に、我々の指示通り、中国にいる我が国〔モンゴル〕の大学院生が友人の内モンゴル人に手紙を書き、チンギスハーンの生誕記念祭はいつ、どのように行われるのかを確認した。（中略）その返答は、記念祭は来年に行なわれ、（中略）内モンゴルの歴史研究者達はチンギスハーンの研究を行っている、彼の功績を高く評価するようだというものである。

第三に、北京大学の内モンゴル人大学院生チェルメグ（Чэлмэг）からモンゴル大学院生パルヤ（Палиа）に話した内容からすれば、内モンゴル人民革命党は記念祭を一九六二年八月に開催するべきだと歴史研究所に指示したということである。[81]」。

トイヴがこの報告に加えた自身の見解によれば、中国がチンギスハーン記念祭を行うのは、ソ連圏諸国が個人崇拝

を否定していることへの中国の反対姿勢を示すものであった。彼はさらに、中国が記念祭を行うことは、モンゴルの独立への否認をも含意していると付け加えた[82]。トイヴは当時の国際関係を踏まえ、説得的な分析を行ったと言えるだろう。しかし彼の報告は、記念祭が中ソ対立の文脈における中国の巻き返しである可能性に触れていなかった。

この時にモンゴルにおいて記念祭を担当した政治局員トムル・オチル（Д.Томор Очир 一九二一から一九八五年）の妻は、次のように書いている。

「我が両隣国〔中国とソ連〕で、チンギスハーンの帰属問題を主張し合う展開になりそうな雰囲気が生じている中、モンゴル科学アカデミーは、チンギスハーンの祖国がモンゴルであることを証明せずに放置することは良くないと考えた。何等かの方法で記念祭を〔モンゴルで〕主催しようと、モンゴル人民革命党中央委員会に訴え出た[83]」。

この記述からすると、このときモンゴル側は、中国による記念祭計画に危機感を抱いていたと考えられる。実際、モンゴルの歴史問題に長年関わってきたトムル・オチルにとって、このことは看過できない問題であったろう。モンゴル指導部は多くの議論を重ねた末に、一九六二年五月二九日の政治局会議において、政府ではなくモンゴル科学アカデミーの主催で式典を開くべきだという決議を採択した[84]。当時の状況に鑑みれば、これは中ソ両国の関係に最大限の注意を払いながらの決断であった。中国は、一九五五年に内モンゴルの「エゼン・ホロー」地域にチンギスハーン廟を建設していた[85]。また、モンゴル駐在元『イズヴェスチヤ』特派員シンカレフは、「ロシアは彼〔チンギスハーン〕のことを悪党とみなしており、中国は天才と見なしていた。モンゴルの両隣国は、彼〔チンギスハーン〕をモンゴル人から奪おうした[86]」と回想で述べている。つまり、チンギスハーンに対する中国とロシアの理解は正反対であり、しかもモンゴルのそれと異なるのである。

結局、モンゴルにおける記念祭は五月三一日にモンゴル国立図書館において開催された。この記念祭は、モンゴルが、チンギスハーンはあくまでモンゴルの英雄であることを示す機会になったと言えよう。言い換えれば、この記念祭を中国で開くことで、モンゴル人の国民感情が中国になびかせようとした中国側の思惑を挫いたのである。実際、このチンギスハーン記念祭が要因かどうか不明だが、中国駐在モンゴル大使ツェベグミドが知人から聞いた話によれば、同年七月に内モンゴル自治区においてモンゴル人民共和国に加盟するという大規模の反中運動が起こっていた。[87]

またモンゴルでの記念祭の開催は、ソ連に対しても大きな意味を持っていた。それは、ソ連に長年抑圧されてきたモンゴル国の民族意識を高める可能性を秘めていたからである。モンゴル指導部が警戒した通り、ソ連はモンゴルがチンギスハーン記念祭を開催することに激しく反対していた。このためモンゴル指導部は、記念祭に関する情報をモンゴル駐在ソ連大使館員に相談することで理解を求めていた。[88] けれども、モンゴル側の配慮は功を奏さなかった。ナディロフは次のように述べる。

「モンゴルに駐在するソ連機関は〔チンギスハーン記念祭の開催に〕大きな不安を抱いていた。この記念祭はモンゴル人の民族意識を高め、反ソ連感情を煽るのではないかと懸念し、（中略）ソ連職員はモスクワへの報告においてモンゴルの記念祭について緊張させる内容の文面を送った。とりわけ、この祝祭に反ソ的な傾向が強く表れていることが強調された」。[89]

またシンカレフもその回想で、ウランバートル駐在のソ連職員からのモスクワへの報告は、意図的に両国関係を緊張させる内容のものであったと記している。彼もこの記念祭はモンゴル人の民族意識を高め、反ソ的雰囲気を作りだしたと評価した。[90]

こうした報告を受けたフルシチョフは、モンゴル指導部に対して、速やかに危険な状況を是正するよう警告した。

シンカレフは、ツェデンバルの妻フィラトヴァ（A. Филатова 一九二〇から二〇〇一年）の回想を引用し、同問題に関するフルシチョフとツェデンバルの会談を次のように紹介している。

「フルシチョフはまるで変っていた。彼はウランバートルで何が起こっているのかと不機嫌に訊いた。チンギスハーンの写真が付いている切手というのは何か。若者がチンギスハーンの写真付きのシャツを着ているというのは何事か。あなた方は何を見ていたのか。そのような状況ではどうやって〔フルシチョフは〕モンゴルを訪問するのだ。[91] 早く問題を解決するように。[92]」。

要するにソ連指導部は、モンゴルから寄せられる情報と当時の中ソ対立を考慮し、非常に神経質になっていたのである。結果的に、モンゴルでの記念祭は、当初計画されたほど盛大なものではなかった。しかし、ダムディンスレンをはじめとする一部の知識人の政府批判は、チンギスハーンに対して敬意を抱いていた[93]とされるツェデンバルにも危機感を抱かせた。このときダムディンスレンは、フランスや欧米諸国ではナポレオンなどの民族的英雄について子供たちに教科書で教えている。しかしモンゴルとソ連の教育機関は子供たちに〔モンゴルの歴史の〕負の側面だけ教えていると非難したのである。[94]

こうして、チンギスハーンの記念祭はツェデンバル政権に打撃を与えた。政権はここで、ソ連から大きな圧力を受けたばかりか、知識人からも批判されたのである。こうして、モンゴル指導部は同記念祭を徹底的に取り締まることになった。指導部は七月一八日に政治局決議を採択し、記念祭のために予定していたすべての切手、映画、出版物の発行を取り止めた。[95] その後モンゴル人民革命党中央委員会第三期総会を開き、トムル・オチルをはじめとする記念祭において主導的な役割を果たした多くの人々を処罰することを決めた。彼らは民族主義を扇動したと批判されたのである。[96] トムル・オチルは、九月一三日に人民革命党付属の党史研究所所長[97]と国家大ホラル役員代議員の職から解任さ

れ、追放処分を受けた。[98] 一〇月二二日に開催されたモンゴル＝ソ連友好協会中央評議会幹部会第三期総会では、トムル・オチルは国家に有害な活動を扇動し、長年にわたって培われてきたソ連とモンゴルの関係の発展を妨害したとする厳しい内容の決議が採択された。[99] 特に彼が最後にソ連訪問した際に、ソ連共産党中央委員会書記イリィチョフ（И. Ильичев）は、トムル・オチルが社会主義の欠陥を強調し、我が敵に隙を与えたと厳しく批判したという。[100] つまり、ソ連指導部も彼の粛清に一定の役割を果たした可能性があると言えよう。

総じて、同記念祭の開催を通して自国の影響力を回復させたいと目論んだ中国の思惑は、ソ連の圧力と内外モンゴルおける民族問題が複雑に絡み合った結果、失敗に終わったのである。

## 五　おわりに

以上の検討を踏まえて同論文をまとめれば、次のようになるだろう。

第一に、モンゴルは中ソ対立が広がる中で、対外的自立性を示したと言える。中ソ両国はモンゴルに自立性があると見なしたからこそ、援助競争を繰り広げ、さまざまな方法でモンゴル指導部に影響を与えようとしたのである。またこの点では特にチンギスハーン生誕祭をめぐる一連の事件が重要である。中国指導部がチンギスハーンという歴史的人物を持ち出してモンゴル人の民族意識を刺激すると、モンゴル指導部は対抗するように自前の祭典を開催したのである。これは国内の文化問題であるが、同時にモンゴル指導部が、モンゴル人と中国人は共通の過去と文化を持つとする中国側の理解に真っ向から対抗する姿勢を示した事件であった。この事件はまた、モンゴルがソ連の意向と異なる政策をとったという意味でも、大きな意味を持った。モンゴル指導部は二つの隣国に完全には支配されないように、細心の注意を払って行動していたのである。

第二に、本稿を通して中ソ対立の具体的な展開が明らかになった。中国指導部は、スターリンの死後に生じたソ連のモンゴルにおける影響力の後退に注目し、その間隙を突いて、経済援助と労働者の派遣を積極的に行うようになった。これは、モンゴルの経済発展に大きく寄与した。しかし、このことは一九五七年にはソ連側の対抗措置を招いた。ソ連側も大型の経済援助をモンゴルに与えるようになったのである。この結果、モンゴル指導部はソ連の重要性を改めて認めざるを得なくなった。それでも中国指導部は、モンゴルを自国の側に引き付ける努力を止めようとしなかった。

第三に、モンゴル指導部は中ソ対立の進展に周到に対応した。彼らは中ソ両国と接近して情報を集め、片方の国を必要以上に刺激しないように努めた。モンゴル指導部は中国側には経済援助を与える方法で良好な関係維持を図った。また、ソ連側には中国の新聞に規制をかけることを通してソ連寄りの姿勢を示した。モンゴルは自国が小国であることを意識しつつ、二つの「社会主義国」の対立という大波によって舵を失わないよう非常に慎重に行動し続けたのである。しかし、それもモンゴルが一定の対外的自立性を有していたからだと言えるだろう。

（1） http://president.mn/content/11824.

（2） オーエン・ラティモアは、衛星国（satellite state）を八つの項目を設けて定義した。その第一に、衛星国は支配国の軌道を移動し、その国の助けを借りて政権をとる。第二に、これ〔衛星国〕は直ちに受け入れないが、積極的に衛生関係を築こうと望む。第三に、衛星国は主要国との関係なくして生存できない。第四に、衛星政権は多くの国民よりも自分たちを支配国と一体だと認識する。第五に、衛星政権やその保護者に対して潜在的な反対者が存在する。第六に、もし政権が転覆されたら国家はどこかの衛星軌道に引っ張られるが、それも衛星である。第七に、衛星政権は自国の保護国と一体化させることを望み、これは〔何かを〕追い越すのに望ましい過程と見なす。第八に、前記のように支配国のどの変化も直ちに衛星国に反映される。Lattimore, O., *Nomads and Commissars,* (Oxford University Press, 1962), p. 156. 彼は衛星国の分類の中で特に

モンゴルについて中国と日本の外的脅威の大きさから逃れるため、自らが進んでソ連の衛星国になったと見なしている。Lattimore, O., *Studies in Frontier History Collected Papers 1928–1958,* (Oxford University Press, 1962), p. 160, 175.296.299–300.

（3）　坂本是忠『モンゴルの政治と経済』、アジア経済研究所、一九六九年。

（4）　Soni, S., *Mongolia-Russia Relations,* (Shipra Publications, 2002). Soni, S., *Mongolia-China Relations,* (Pentagon Press Published, 2006).

（5）　Luthi L., *Sino Soviet Split,* (Princeton University Press, 2008).

（6）　*Галенович Ю. М.* Пятьдесят Лет с Китаем. М., 2011.
*Галенович Ю. М.* Два Первых Лица. М., 2012.
*Галенович Ю. М.* Сталин и Мао два вождя. М., 2009.

（7）　*Дамдинсүрэн С., Батсайхан О., Шепелев В., Н.* Монгольын Тухай БХК (6) Нын Баримт Бичиг 3-боть 1941–1952. УБ., 2009. тал. 278–281.

（8）　ГХЯ (Гадаад хэргийн яам). ф5. т2. хн100. тал. 93.

（9）　ГХЯ. ф5. т2. хн100. тал. 97.

（10）　ГХЯ. ф5. т2. хн100. тал. 77.

（11）　Правда. 2 Август. 1954.

（12）　周恩来は一九五二年九月に初めてモンゴルを訪問している。

（13）　一九〇五年に内モンゴルトムト旗に生まれた。一九二三年に中国社会主義青年団入団。一九二五年に内モンゴル人民革命党第一回大会の代表に選ばれた。彼は、およそ一九二七年にモスクワの東方勤労大学に学んだ。一九三七年に延安で抗日軍政大学の民族学院教育長、蒙古文化協会会長、陝甘寧辺区民族問題委員長。一九四五年中共七全大会では少数民族中ただ一人の中央委員候補、一九五六年中共第八回全大会で中央委員、中央委員政治局員候補、副総理兼民族事務委員会主任。内モンゴル自治区においては政府・党・軍の実権を収めていた。烏蘭夫革命史料編研究編『烏蘭夫回顧録』、中共党史資料出版社、一九八九年。

（14）　王樹盛、郝玉峰『烏蘭夫年譜』上、中共党史料出版社、一九八九年、三二一頁。

（15）　Soni, *op.cit.,* 2006, p. 151.

(16) НГА (Намийн тов архив). ф4. т22. хн345. тал. 08009.
(17) НГА. ф4. т22. хн325. тал 21.
(18) ГХЯ. ф5. т2. хн246. тал. 23–25.
(19) НГА. ф4. т22. хн345. тал. 08007.
(20) ГХЯ. ф5. т2. хн174. тал. 99.
(21) НГА. ф4. т22. хн325. тал. 159.
(22) НГА. ф4. т22. хн325. тал. 166–171.
(23) *Казакевич И.С.* Советское-Монгольские отношение. Том 2. М., 1979. С. 223–224.
(24) ルーペンによれば一九五六年末にはソ連人の数は一六〇〇〇人程であった。*Рупен А., Орчулсан Аким Г.* Хорьлугаар зуунний Монголччуд. УБ., 2000. тал. 315.
(25) Murphy, G., *Soviet Mongolia A Study of Oldest Political Satellite,* (University of California Press, 1966), p. 152.
(26) *Эмхтгэсэн Сумьяа Б.* Г эрэл сүүдэр Ю. Цэдэнбалын хувийн гэмдэглэлээс. УБ., 1992. тал. 94.
(27) Унэн. 1958. 10. 1.
(28) Murphy, *op.cit.,* 1966, p. 175.
(29) *Рощин С.К.* Социалистический уклад в экономике Монгольской Народной Республики. М., 1958. С. 83.
(30) ГХЯ. ф5. т12. хн264. тал. 80.
(31) Soni, *op.cit.,* 2006, p. 153.
(32) ГХЯ. ф2. т1. хн219. тал. 43–45.
(33) ГХЯ. ф2. т1. хн219. тал. 55.
(34) *Капица М.С.* На разных параллелях. М., 1996. С. 196–197.
(35) Murphy, *op. cit.,* 1966, p. 195.
(36) *Ганенович Ю.М.* Два первых лица Хрущёв и Мао Цзэдун. С. 124.
(37) ГХЯ. ф5. т2. хн296. тал. 3.
(38) ГХЯ. ф5. т2. хн225. тал. 29–34. 沈志華主編『俄羅斯解密档案選編—中蘇関係第八巻』、中国出版集団東方出版中心、二〇

一四年、二九七頁。

(39) ГХЯ. ф5. т2. хн241. тал. 30–35.

(40) ГХЯ. ф5. т12. хн251. тал. 2.

(41) Унэн. 1958. 8. 10.

(42) ГХЯ. ф2. т1. хн267. тал. 78.

(43) ГХЯ. ф2. т1. хн267. тал. 149.

(44) ГХЯ. ф2. т1. хн267. тал. 75.

(45) ГХЯ. ф2. т1. хн267. тал. 150.

(46) 鯉渕信一「モンゴル経済政策の展開と当面の諸問題」、木村哲三郎『ソ連型社会主義国の経済改革』、アジア経済研究所、一九八八年、一一四頁。

(47) Madhok, S., *Sino-Mongolian Relations,* (New Delhi, 2005), p. 81.

(48) Soni, *op.cit.,* 2006, p. 163.

(49) モンゴルの権力闘争は、中ソ対立における一般的な政治図式とは異なった側面を有している。これは、モンゴル政治の特色であると言えよう。政治的図式上の「ねじれ」は存在したが、それは、なぜ発生したのかは、現在の資料の開示状況では解明することは困難である。

(50) オユンバートル・ムンヘジン「スターリン批判とモンゴル人民共和国の政治過程――ソ連の影響下におけるモンゴル指導部の権力闘争を中心に」、『スラヴ研究』、六一号、二〇一四年、七一―七九頁。

(51) РГАНИ. ф5, Оп28, Ед.хр487, с. 94.

(52) *Цэдэнбал Ю.* Эрин зуны түүхэн элч. УБ., 2007. тал. 186.

(53) *Болдбаатар Ж., Дашдаваа Ч.* Шинчлэлийн телее хеделгеен түүний хувь заяа 1952–1966. УБ., 2005. тал. 105–109.

(54) オユンバートル、前掲書、二〇一四年、七六―七七頁。

(55) モロトフのモンゴル派遣は左遷であるという側面を有したが、フルシチョフとしてはモンゴル内政に詳しいモロトフにモンゴル政治内の権力闘争を解決させる意図を持たせていたものと考える。オユンバートル、前掲書、二〇一四年、七五―七九頁。

(56) オユンバートル、前掲書、二〇一四年、七八—七九頁。
(57) НТА. ф4. т23. хн368. тал. 82.
(58) НТА. ф4. т23. хн368. тал. 76, 87.
(59) オユンバートル、前掲書、二〇一四年、七七—七八頁。
(60) 沈志華主編、前掲書、二〇一四年、二九七頁。
(61) *Надиров Ш. Г.* Цеденбал 1980 год. М., 1995. С. 49.
(62) ガレノヴィッチによれば、チェルボネンコは中国専門家ではなく、中国語も知らなかった。彼は四四歳で中国へ派遣されたが、それまで対外政策に関する経験は全くなかった。*Галенович Ю. М.* Пятьдесят лет с Китаем. М., С. 156–157.
(63) ГХЯ. ф5. т2. хн253. тал. 21–25.
(64) ГХЯ. ф5. т2. хн256. тал. 3.
(65) ГХЯ. ф5. т2. хн263. тал. 6.
(66) ГХЯ. ф5. т2. хн253. тал. 32.
(67) ГХЯ, ф5. т2. хн253. тал. 84.
(68) ГХЯ. ф5. т2. хн263. тал. 85.
(69) 中国がチンギスハーン生誕八〇〇周年記念祭を開催する問題。次章で論じる。
(70) *Жаргалсайхан Б.* Алаг жарны бодрол, Хоёр дах хэвлэл. УБ., 2015. тал. 175–176.
(71) Woodrow Wilson International Center/The Cold War International History Project "COLD WAR INTERNATIONAL HISTORY PROJECT, Inside China's Cold War", Fall 2007/ Winter 2008, p. 187.
(72) ГХЯ. ф5. т1. хн268. тал. 8–11.
(73) ГХЯ. ф5. т2. хн272. тал. 8.
(74) ГХЯ. ф5. т2. хн272. тал. 14.
(75) ГХЯ. ф2. т1. хн291. тал. 146–147.
(76) НТА. ф4. т24. хн4. тал. 27–28.
(77) *Цэдэнбал Ю.* Илтгэл үгүүлэл хэлсэн үг. Зботь. УБ., 1967. тал. 91.

(78) ГХЯ. ф5. т2. хн296. тал. 30–34.
(79) 沈志華主編『俄羅斯解密档案選編――中蘇関係第一〇巻』、中国出版集団東方出版中心、二〇一四年、一一―一六頁。
(80) Rahul, R., *Mongolia between China and USSR*, (Munshiram Manoharlal Publishers, 1989), pp. 31. アジア局課長『モンゴル年報』、外務省アジア局課、一九六二年、五五頁。
(81) ГХЯ. Ф5. Т2. хн296. тал. 13–14.
(82) ГХЯ. Ф5. Т2. хн296. тал. 14–16.
(83) *Нинжбадгар С.* Түүхэн үнэн ганц Дарамын Төмөр Очир. УБ., 2001. тал. 28.
(84) *Болбаатар Ж.* Шинчлэлийн төлөө хөдөлгөөн түүний хувь заяа 1952–1966. тал. 121.
(85) *Рупен А.* Хорьдугаар зуунний Монголчууд. тал. 325.
(86) *Шинкарев Л.Ш.* Цеденбал и его время. Том 1. М., 2006. С. 199.
(87) 沈志華主編『俄羅斯解密档案選編――中蘇関係第九巻』、中国出版集団東方出版中心、二〇一四年、四〇二頁。
(88) *Болбаатар Ж.* Шинчлэлийн төлөө хөдөлгөөн түүний хувь заяа 1952–1966. тал. 119.
(89) *Надиров Ш.Г.* Цеденбал 1980 год. С. 32–33.
(90) *Шинкарев Л.Ш.* Цеденбал и его время. Том 1. С. 200.
(91) ツェデンバル日記によれば、一九六一年一二月一八日に会談した際、ツェデンバルとフルシチョフは一九六二年六月から八月の間の適切な時期にフルシチョフのモンゴルを訪問実現させることについて相互確認を行っていた。*Эмхтгэсэн Сүмьяа Б.* Гэрэл сүүдэр Ю. Цэдэнбалын хувийнгэмдэглэлээс. тал. 97–98. しかしチンギスハーン記念祭が障壁になり、その日程を取り下げたものだと思われる。
(92) *Шинкарев Л.Ш.* Цеденбал и его время. Том 1. С. 201.
(93) ナディロフは、ツェデンバルがチンギスハーンに対して尊敬心を持っていたことを明かしている。*Надиров Ш. Г.* Цеденбал 1980 год. С. 30–31.
(94) *Надиров Ш.Г.* Цеденбал 1980 год. С. 32.
(95) НТА. ф4. т26. хн6. тал. 6.
(96) *Болбаатар Ж.* Шинчлэлийн төлөө хөдөлгөөн түүний хувь заяа 1952–1966. тал. 126, 134.

（97） НТА. ф4. т26. хн6. тал. 120.
（98） НТА. ф4. т26. хн6. тал. 119.
（99） アジア局中国課長、前掲書、一九六二年、一二頁。
（100） *Баатар С.* Хэлмэгдсэн зая 10. УБ., 2005. тал. 162.

**オユンバートル・ムンヘジン**
所属・現職　慶應義塾大学大学院法学研究科後期博士課程
最終学歴　慶應義塾大学大学院法学研究科前期博士課程
所属学会　日本国際政治学会
専攻領域　国際政治、アジア冷戦史、モンゴル政治
主要著作　「スターリン批判とモンゴル人民共和国の政治過程――ソ連の影響下におけるモンゴル指導部の権力闘争を中心に」『スラヴ研究』第六一号（二〇一四年）